

短報

島根県で採集されたきのこ (IV)

— 2009~2012年の調査記録 —

宮崎 恵子・富川 康之

Collected of Higher Fungi in Shimane Prefecture (IV)

— Record of Survey of the Indigenous Species from 2009 to 2012 —

MIYAZAKI Keiko and TOMIKAWA Yasuyuki

要 旨

2009 ~ 2012 年, 本県で採集された子実体を観察した結果 365 種を認めた。これらのうち 313 種 (7 綱 20 目 64 科 162 属) の種名を特定し, 既存の採集記録になかった 28 種 (3 綱 9 目 22 科 25 属) を認めた。また, 既存の採集記録に略名で記載していた種のうち 2 種の種名を特定した。

キーワード: きのこ, 同定, 分類, 種名, 種数

I はじめに

当センターでは本県に自生するきのこの発生実態を調査, あるいは情報収集し, その結果は有用食用きのこの栽培化に向けた候補選抜, 森林レクリエーション活動, 自然教育への支援などに利用している (富川ら, 2006)。これらの調査結果は本県のきのこ資源量を記録する貴重な資料であると考え, 本報告の第 1 報では著者らが観察した種のほか, 山本ら (1960), 尾添 (2003), 前川 (2004) による報告, また当センターに残されている乾燥標本などを整理し, 県内採集きのこの目録を作成した (富川ら, 2009)。この報告は, 1956 ~ 2008 年に県内で網羅的な調査が実施された成果として有用であるが, 自生きのこの発生実態を知るためにはさらに詳細な調査が必要と考える。そこで第 2 報, 第 3 報では自生きのこの発生実態を調査するための手法について検討し, ルートセンサス法およびきのこ観察会における住民参加型調査 (定点観察法) について有効性を評価した (富川ら, 2012; 宮崎ら, 2012)。当センターではこれらの調査を継続し, きのこ資源量把握に努めている。本報告は 2009 ~ 2012 年の調査結果から, 採集きのこの種数と, 新規に採集され

た種については種名, 採集時期および採集場所などを記述する。

なお, 本調査ではきのこ観察会で採集された子実体の多くを観察対象とした。その際に快く子実体を提供して頂いた各観察会の主催者, 並びに参加者へ感謝を申し上げます。

II 調査方法

1. 採集地および採集方法

2009 ~ 2012 年, 既存調査林 (富川ら, 2010) などで著者らが採集した子実体, また他の採集者からの情報に基づき, 採集日および採集場所が明らかな子実体を観察対象とした (12 市町, 標高 10 ~ 940 m)。このうち 2009 年は飯石郡飯南町に設けた 4 調査林において, ルートセンサス法によって子実体を探索した。なお, 各調査林は標高 440 ~ 470 m, いずれも褐色森林土で, コナラが優占する落葉広葉樹林 (一部にアカマツ混交) であった。踏査ルートは広葉樹林のほか, 近隣にスギ・ヒノキ人工林, モウソウチク林がある場合はこれらも対象となるように設置した (富川ら, 2009; 富川ら, 2012)。春

～秋季は4～25日間隔, 冬季は無積雪時に2～3名がルート上を踏査して子実体を探索した。

また, 調査期間中の秋季に4地域で開催された計6回のきのこ観察会(2009年1回, 2011年3回, 2012年2回)において, 参加者(26～45名)とともに子実体を採集した。各観察会の子実体採集地は松江市宍道町(標高100～170 m, 常緑広葉樹林), 雲南市三刀屋町(標高150～300 m, 常緑広葉樹林), 邑智郡美郷町(標高200～300 m, 落葉広葉樹林), 飯石郡飯南町(550～700 m, 落葉広葉樹林)であった。常緑広葉樹林ではスダジイ, 落葉広葉樹林ではコナラが優占し, それぞれにアカマツが混交していた。

2. 同定・分類

同定は子実体, 胞子などの形態的特徴を観察し, 図鑑(本郷, 1994; 本郷, 2001; 池田, 2005; 今関ら, 1987; 今関ら, 1989; 今関ら, 1988; 長沢, 2003; 城川ら, 1996)の記載内容と照合した。学名はIndex Fungorum(CABI Bioscience *et al.* 2012)に従い, 学名と和名の照合は勝本(2010)および今関ら(2011)の記述を参照した。

III 調査結果

観察した子実体は1,016個体で, このうち7綱20目64科162属313種の種名を特定した。これらの他に, 種名は未特定としながらも特有の形態的特徴が観察された53種を区別して記録し, 本調査で確認した種数を計365種とした。

本調査で種名を特定した313種のうち, 既存の採集記録(富川ら, 2009; 宮崎ら, 2012)に未掲載の3綱9目22科25属28種について目録を作成した。また, 本報告の第1報で略名としたベニタケ属-1(第1報目録のNo. 271)およびチチタケ属-3(第1報目録のNo. 284)の2種は, それぞれウズゲツチイロタケ(No. 14)およびヒロハウスズミチチタケ(No. 16)と同定し, 目録へ掲載した。なお, 目録へは掲載しなかったが, キヌカラカサタケ属1種, フウセンタケ属3種の自生を確認した。目録では各種の採集時期, 採集地の林相, きのこ観察会での採集であるかを示した。林相を示さなかった種は次の4種で, サケツバタケ(No. 6)は造成直後の法面から, キサケツバタケ(No. 7)は牛糞堆肥から, オオシビレ

タケ(No. 8)は稲わら・籾殻の堆積地から採集し, 菌寄生性のスッポンヤドリタケ(No. 30)はコナラ・アカマツ混交林で発生したスッポンタケ(*Phallus impudicus*)の幼菌上で観察された。

ルートセンサスによる子実体探索では78種を採集し, そのうち広葉樹枯死木から採集したイボラシャタケ(No. 21), スギ林地から採集したクロアシボソノボリリュウタケ(No. 28)の2種を新規に認めた。また, きのこ観察会では153種を採集し, そのうち10種を新規に認めた。これらは常緑広葉樹林で5種, 落葉広葉樹林で2種, アカマツ林で2種, コナラ・アカマツ混交林で1種を採集した。

目 録

種名の後に, 採集時期(月および上～下旬の区別), 採集した林相(常緑広葉樹林および落葉広葉樹林はそれぞれ「常緑樹林」および「落葉樹林」と略記), 観察会の採集であるかを記した。

Marasmiaceae ホウライタケ科

Collybia モリノカレバタケ属

1. *Collybia neofusipes* アカチャツエタケ, 7中, マツ林

Amanitaceae テングタケ科

Amanita テングタケ属

2. *Amanita ibotengutake* イボテングタケ, 7中, マツ林
3. *A. hongoi* シロオニタケモドキ, 10上, 常緑樹林, 観察会

Agaricaceae ハラタケ科

Lepiota キツネノカラカサ属

4. *Lepiota castanea* クリイロカラカサタケ, 10中, 落葉樹林

Psathyrellaceae ナヨタケ科

Cystoagaricus クロヒメオニタケ属

5. *Cystoagaricus strobilomyces* クロヒメオニタケ, 9下, 落葉樹林

Strophariaceae モエギタケ科

Stropharia モエギタケ属

6. *Stropharia rugosoannulata* サケツバタケ, 10 下
7. *S. rugosoannulata* f. *lutea* キサケツバタケ, 11 上

Psilocybe シビレタケ属

8. *Psilocybe subaeruginascens* オオシビレタケ, 5 下

Entolomataceae イッポンシメジ科

Entoloma イッポンシメジ属

9. *Entoloma violaceum* コムラサキイッポンシメジ,
10 中, 落葉樹林

Paxillaceae ヒダハタケ科

Paxillus ヒダハタケ属

10. *Paxillus involutus* ヒダハタケ, 9 下, 落葉樹林

Boletaceae イグチ科

Boletus ヤマドリタケ属

11. *Boletus obscureumbrinus* オオコゲチャイグチ,
7 下, 常緑樹林
12. *B. violaceofuscus* ムラサキヤマドリタケ, 7 上,
常緑樹林

Russulaceae ベニタケ科

Russula ベニタケ属

13. *Russula grata* クサハツモドキ, 9 下, 10 上,
常緑樹林, 観察会

Multifurca ウズゲツチイロタケ属

14. *Multifurca ochricompacta* ウズゲツチイロタケ,
7 上, コナラ・アカマツ林

Lactarius チチタケ属

15. *Lactarius akahatsu* アカハツ, 10 下, マツ林,
観察会

16. *L. subplinthogalus* ヒロハウスズミチチタケ,
6 下~ 10 中, 落葉樹林

Gomphaceae ラツパタケ科

Gloeocantharellus オオムラサキアンズタケ属

17. *Gloeocantharellus pallidus* シロアンズタケ, 10 上,
10 中, 落葉樹林, 観察会

Clavariaceae シロソウメンタケ科

Clavaria シロソウメンタケ属

18. *Clavaria fumosa* サヤナギナタタケ, 10 中,
常緑樹林, 観察会

Phanerochaetaceae マクカワタケ科

Terana アイコウヤクタケ属

19. *Terana coerulea* アイコウヤクタケ, 10 下,
常緑樹林, 観察会

Thelephoraceae イボタケ科

Polyozellus カラストケ属

20. *Polyozellus multiplex* カラストケ, 10 下, 落葉樹林,
観察会

Tomentella ラシャタケ属

21. *Tomentella crinalis* イボラシャタケ, 2 下, 5 中,
落葉樹林

Albatrellaceae ニンギョウタケモドキ科

Albatrellus ニンギョウタケモドキ属

22. *Albatrellus caeruleoporus* アオロウジ, 10 下,
マツ林, 観察会

Meripilaceae トンビマイタケ科

Meripilus トンビマイタケ属

23. *Meripilus giganteus* トンビマイタケ, 9 下,
落葉樹林

Fomitopsidaceae ツガサルノコシカケ科

Laetiporus アイカワタケ属

24. *Laetiporus sulphureus* アイカワタケ, 10 上,
常緑樹林, 観察会

Polyporaceae タマチヨレイタケ科

Perenniporia ウスキアナタケ属

25. *Perenniporia subacida* キンイロアナタケ, 11 下,
落葉樹林

Auriculariaceae キクラゲ科

Exidia ヒメキクラゲ属

26. *Exidia recisa* サカズキキクラゲ, 1 下, 常緑樹林

Sarcoscyphaceae ベニチャワンタケ科

Wynnea ミミブサタケ属

27. *Wynnea gigantea* ミミブサタケ, 6 下, 落葉樹林

Helvellaceae ノボリリュウタケ科

Helvella ノボリリュウタケ属

28. *Helvella atra* クロアシボソノボリリュウタケ,
7 下, 10 中, スギ林

Morchellaceae アミガサタケ科

Morchella アミガサタケ属

29. *Morchella esculenta* トガリアミガサタケ, 4 上,
落葉樹林

Hypocreaceae ニクザキン科

Podostroma ツノタケ属

30. *Podostroma solmsii* f. *octospora*
スッポンヤドリタケ, 10 上, 10 下, 観察会

IV 考 察

島根県内で採集され、種名が特定できたきのこは本報告の第1報へ記載した617種(富川ら, 2009), 第3報へ記載した種のうち新規に認めたミヤマタマゴタケ(*Amanita imazekii*, 3報目録のNo. 41), コチャダイゴケ(*Nidula niveotomentosa*, 第3報目録のNo. 59)の2種(宮崎ら, 2012), 本調査で新規に認めた28種および第1報の略名を種名に修正した2種で、これらは8綱23目83科267属649種となった。また、これまでに略名を記録している種を含めると、本県には少なくとも694種のきのこが自生していると考えられる。未だ種名の特定に至っていない種については今後も子実体採集を継続するとともに、保管しているスケッチ図, 乾燥標本およびDNAを用いた同定を検討している。

本調査で新規に自生を認めたスッポンヤドリタケ(No. 30), 第1報の略名を種名に修正したウズゲツチイロタケ(No. 14)の2種は掲載されている図鑑が少なく、

北陸のきのこ図鑑(池田, 2005)では両者とも新称とされている。また、池田(2005)は前者の発生は稀で、分布は石川県および京都府, 後者の分布は石川県, 兵庫県および青森県と記述しており, 本県での採集例は稀少と考える。イボテングタケ(No. 2)はこれまでテングタケ(*Amanita pantherina*)と区別せずに記録していたが(第1報目録のNo. 97), Oda *et al.* (2002)によって本種が報告されたため, あらためて採集子実体を観察した。その結果, 本県ではテングタケの他に本種も発生していることが確認された。

食用菌として知られるムラサキヤマドリタケ(No. 12), 人工栽培が検討されているサケツバタケ(No. 6), キサケツバタケ(No. 7)の自生を新規に認め, これらは栽培試験あるいは増産試験の候補とした。一方, オオシビレタケ(No. 8)は2009年に県内で発生した中毒事故に伴う調査によって自生が確認された。そのため, 以後は誤食を防止するための注意喚起を継続している。

2009年のルートセンサスによる子実体採集では, 新規に2種しか確認できなかった。この調査林および踏査ルートは2003年に設置し, 2008年までの6年間で既に414種の自生を確認し, 381種の種名を特定しており(富川ら, 2009; 富川ら, 2012), 効果的に新規自生種を観察するには調査対象林を別の地域に設置する必要がある。また, きのこ観察会を利用することで広域から子実体を採集することができ, 調査手法として有効であった。そのため県内各地域で開催されているきのこ観察会へ積極的に参加して調査を継続する予定である。

引用文献

- CABI Bioscience, CBS and Landcare Research. Index Fungorum (CABI Bioscience database). <http://www.indexfungorum.org>. 2012.12.25 閲覧
- 本郷次雄(1994)山溪フィールドブックス 10 きのこ. 山と溪谷社
- 本郷次雄(2001)カラー版きのこ図鑑. 家の光協会
- 池田良幸(2005)北陸のきのこ図鑑. 橋本確文堂
- 今関六也・本郷次雄(1987)原色日本新菌類図鑑(Ⅰ). 保育社
- 今関六也・本郷次雄(1989)原色日本新菌類図鑑(Ⅱ). 保育社

- 今関六也・大谷吉雄・本郷次雄 (1988) 日本のきのこ.
山と溪谷社
- 今関六也・大谷吉雄・本郷次雄 (2011) 増補改訂新版日
本のきのこ. 山と溪谷社
- 勝本謙 (2010) 日本産菌類集覧. 日本菌学会関東支部
- 前川二郎 (2004) 菌類. (改訂しまねレッドデータブッ
ク. 島根県環境生活部景観自然課, 報光社): 373-
377.
- 宮崎恵子・富川康之 (2012) 島根県で採集されたきのこ
(Ⅲ) -きのこ観察会での採集実態-. 島根中山間研
報 8: 105-112.
- 長沢栄史 (2003) 日本の毒きのこ. 学習研究社
- Oda, T., Yamazaki, T., Tanaka, C., Terashita, T., Taniguchi, N and Tsuda, M (2002) *Amanita ibotengutake*
sp. nov., a poisonous fungus from Japan.
Mycological Progress 1 (4): 355-365.
- 尾添茂 (2003) 浜山 (出雲市) で採集したキノコ. 島根
病虫害研究会報 28: 26-29.
- 城川四郎・青島清雄 (1996) 猿の腰掛け類きのこ図鑑.
地球社
- 富川康之・宮崎恵子 (2010) 島根県東部地域におけるコ
ウタケ発生要因 (I) -子実体発生地域および発生環
境-. 島根中山間研報 6: 61-68.
- 富川康之・宮崎恵子 (2012) 島根県で採集されたきのこ
(Ⅱ) -ルートセンサス法による調査結果 (新分類体
系に基づく集計) -. 島根中山間研報 8: 99-104.
- 富川康之・齋藤恵子 (2006) 島根県の菌類 (きのこ類).
(新島根の生物. 日本生物教育会島根県大会実行委員
会, 報光社): 39-47.
- 富川康之・齋藤恵子 (2009) 島根県で採集されたきのこ
(I) -コナラ林での調査および県内採集記録-. 島
根中山間研報 5: 123-148.
- 山本昌木・安盛博 (1960) 匹見演習林産菌類雑録 (I).
島根農科大研報 8A: 178-185.